

資料 3

# 都立中央図書館の 在り方を考える 有識者会議 (第3回)

令和5年9月21日



回	日程	内容案
第1回	7月27日(木)	○都立中央図書館の概要、現在の取組 ○新たな図書館に必要な視点
第2回	8月29日(火)	○新たな図書館に必要な視点 ○担うべき機能・役割
第3回	9月21日(木)	○担うべき機能・役割、コンセプト
第4回	10月(予定)	○有識者会議のまとめ (新たな図書館の機能・役割、コンセプト)

## 会議資料

- 1 前回の主な御意見（これからの中央図書館の機能）
- 2 中央図書館の新たな機能
- 3 コンセプトのベースとなる考え方
- 4 有識者会議まとめのイメージ

# 1 前回の主な御意見 ①

---

## 【総論（図書館の役割・位置付け）】

- お金がなかったり、親や学校とうまくいかなかったりしても、ここに来て知の喜びに触れられることが、図書館の担ってきた大きな役割
- 街の書店が次々と消えている中、図書館への期待は別の形で出てきている。50年後どうなっていくかも、見据えて検討する必要がある。
- 中央図書館の在り方を議論することは、東京で得られる学びや、東京だからこそ、学びに対してどういう視座で住民が生活できるかについて考えること。
- 知性や学びそのものに対しあまりに離れてしまっていることが東京、日本の課題。知性をボトムアップすることを目標に掲げるべき
- 図書館の四つの機能（収集、整理、保存、提供）は、枠組みや形をどう変えていくのか、どういうイノベーションを起こすのかという観点  
が大事。世界の図書館の在り方を変えていくチャレンジの機会にもなる。単に一図書館の未来と言うより、人類の知の未来を考える話  
になってくる。
- 国会図書館、区立、民間の図書館がある中で、中央図書館はどうポジショニングを取っていくのか
- リカレント、百年学び続ける時代の中で図書館の位置づけは本当に重要性を増しており、生涯学習の拠点にもなるのではないか
- デジタル社会の公共図書館の在り方を考えるにあたり、アクセシビリティ、コモンズの機能、デジタルデータの提供の3点が前提となる。
- デジタル社会の本は三つ特徴がある。一つ目は動画や声、音等が全部埋め込まれる。これらの本が集まる場所は限りなく映画館に近くなる。  
2つ目は、インタラクティブな本。図書館に来た人々が本に書き込んだり、新しい本を作ったりすることが可能になる。一方で、フェイク  
や無断引用、剽窃があってはいけないので、作っていく過程で学ぶ仕組みが必要。3番目はユビキタス。場所に拘束されない本になる

# 1 前回の主な御意見 ②

---

## 【対象者・ステークホルダー】

- 来館者以外にも、来館者予備軍や図書館を支えてくれる方、図書館で働く方々の位置付けや役割も重要
- 本を媒介に都民の色々な層の人たちに対して、実際の課題と本を繋ぐ立ち位置になれるかどうかは大事
- 学びに対して「それが何の役に立つんだ」「どうでもいいや」と思っている人にこそ、何かきっかけになると良い。図書館に知が集積されていることを、多くの機会に、明るく楽しい状態で、お知らせできたらいい
- 夢や目標、やりたいことが特になく人がいけないもののように扱われることも問題。キラキラムードのない人も、何となく行きたくなる居場所になることが、孤独や分断等を防ぐ意味でも大事
- 対象者を広げることが大事。「好きなことを広げたい」「誰かと何か作ってみたい」「面白いことないかな」等、目的ベースで揃えてもいい
- 最初から一気に対象を広げるのではなく、知性の底上げに知見・経験を持つ方々の取組みから始めたり、小学生や高齢者、海外の人等様々な属性の人たちが、それぞれ作り手に回ったりしながら、一般の人たちが関わるといった感覚を醸成し、広げていく仕掛けができると面白い。

## 【インクルーシブ】

- 最新事例は、常にキャッチアップしておいたほうがいい。ここの図書館でこれをやっているから、これを入れようと言うよりも、その図書館で今導入しているものが最先端の科学技術分野でどの位置になるかは、常に調べられた方が良く
- デジタル図書へのアクセスにおいて、あらゆる人が取り残されないロールモデルになって欲しい。取り残されていると感じた人たちがこの図書館に行ってキャッチアップし、知識やスキルを身に付けて、すべての人が社会の中で活躍して行く時代が求められている
- テクノロジーは完璧ではなく、それだけでは自立できないが、テクノロジーによって、これまでできなかったことが可能になる。できるだけ普通にどこかに出かけたり、みんなと議論するためにテクノロジーを最大限活用することが必要
- （アプリで多言語化など）自分で適合化・最適化させるデバイスを持つ人の来館が考えられる。多様な技術を受け入れられるインフラが大事

# 1 前回の主な御意見 ③

---

## 【創造】

- 「知性」とは、世の中には多様な考えがあるということを知ること。目的がなくても、「とりあえず図書館に行ったら何か起きるかもしれない」という創発の装置といった、発想の転換や役割、存在意義や価値を打ち出すことがあっていい
- 世界では、図書館が、知るだけではなく創る場に変わりつつあると言われている。
- メーカースペースだけをするわけではなく、新しい機能やあり方で「作る」「繋がる」を考えてぜひ挑戦していただけると良い
- 例えば、ヘルシンキ中央図書館では、フロアごとに静かにリラックスして学べる場と、モノづくりを学び、創造性に触れられる場に分けられている。静かに本を読みたい利用者に限らず、もしかしたら面白いアニメや漫画があるかも知れないし、音楽があるかも知れない、自分が何か作れるかも知れないというワクワク感があり、多様なきっかけがある場所ができると良い。
- 日本で「作る」というとキラキラした印象になってしまう。緩やかな「遊び場」で、作り手にもなれることが、普通の人たちにとってわくわくするような言葉遣いで発信できると良い。
- 知識を受け取れて、正しいものに出会うだけではなく、自分がクリエイトする気持ちにさせてくれる「遊び場」が大事。子どもだけではなく、大人も遊んでいいよという場を、公的にパブリックな場として作れると面白い。
- 「作る」と「繋がる」をつなげるのは本。**Book beyond book**、本を核に考えることにより「作る」と「繋がる」がつながるのが図書館
- 市民が作ったものが、図書館の市民コレクションのような形で収蔵され、検索もできるようになっていく。
- 図書館は知を消費するだけでなく作る空間であり、知は活字だけでなく、映像や音楽でもあり、もっと言えば私たち自身が本。私たちの中には、子どもの頃の記憶や父母、祖父母の記憶、住んでいた場所の記憶などが溜まっている。生きている書物と書物が出会う場所、集積されていく場所が図書館であり、単にパブリッシュ、大量生産された本がストックされ、提供される場所などではない。
- 司書の役割も、館内にいる方だけではなく、街の人も含めた繋がりが建物を超えることが理想。東京全体がライブラリーといった構想も見える。

# 1 前回の主な御意見 ④

## 【空間・リアル・施設】

- 障害者のために特別な対応をやり過ぎになることによって、そうではない人との相互理解が妨げられてはいけない。一方で、障害者は自立しなければいけないが、そこはテクノロジーの進化によって絶対が変わってくる。そうなった時、法律や社会的な仕組みを変えていかなければいけないが、そこは簡単にはいかない。図書館には物理的な場所があるので、今あるアクセシビリティに関して考える市民会議のようなもの開けて、新しい時代におけるダイバーシティやインクルージョンを考えられるような場になって欲しい
- 中央図書館がリアルに存在する意義を考えると、本を介してという点が重要。単に本がたくさん置いてある場所ではなく、本の見せ方、どういうテーマで置くか、様々なイベントとの連携等により、実在することの特徴を出さないと、電子図書館に対して存在意義がなくなっていく。
- 障害のある人に特化するだけでなく、遍く全ての人間の暮らしがどうあるべきかを考えていくべき。人懐っこい空間であれば、人がコミュニケーション取りやすく、優しくなれるかもしれない。ハード面で取りこぼした優しさ、インクルーシブに対する準備をし切れないところを人の力で補うことが、リアルな場でできること
- シンポジオンのように、みんなで飲んだりしながら結論もなく喋る体験といった、ダラダラと知性に触れられることも素敵
- 中央図書館があるということは、公正で地に足のついた、どんな時代でも振り回されない情報がありながらも、手に取りやすさや居心地の良さがあり、ヘルシンキ中央図書館の建物のように本能的な喜びを担う両輪があると素敵
- ヘルシンキ中央図書館のような建物があれば、気軽に行くことができ、知に触れるということが全く構えずに、身近になる。感覚的に知性に対する距離感を埋めていくことが本当の課題
- ここに来れば知性、知識がアップデートできるような新しいわくわく感がある、その趣旨に合う形でデジタルの機能等をどう出していか
- 「感じる空間」があれば自分からアクションしたくなる。地域性や街づくりの中における連関性も定義として入れて検討するとよい

## 2 中央図書館の新たな機能

➤は事例（イメージ）

新たな機能	内 容
<b>あらゆる人の知的好奇心を喚起し学びを深める</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・「本」への無関心層、子供や障害者など、多様な人を対象としたアプローチ<ul style="list-style-type: none"><li>➤他機関と連携した魅力的な展示・イベントの開催</li></ul></li><li>・知識・知性のアップデート<ul style="list-style-type: none"><li>➤ワークショップの開催、リカレント教育の場</li></ul></li><li>・江戸・東京の情報集積と展示<ul style="list-style-type: none"><li>➤フィジカルとサイバーをミックスしたメニューの提供</li></ul></li></ul>
<b>多様な人との交流や創造活動を生み出す</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・誰でも気軽に創造活動に取り組むことのできる環境を提供<ul style="list-style-type: none"><li>➤芸術・工作を含めた創作活動のためのスタジオやラボの設置</li></ul></li><li>・世界共通の課題や、市民自身の課題への解決に向けた支援<ul style="list-style-type: none"><li>➤第一線で活躍する人材による講演会、シンポジウム等の開催</li><li>➤都市課題等のテーマを扱うエリアの設置</li></ul></li><li>・多様な人々と交流し、気づきや思索のきっかけを得る場<ul style="list-style-type: none"><li>➤哲学カフェ・対話サロンの設置</li></ul></li></ul>
<b>多様な知が集積する</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・音響・映像を含めた多様な形態の「知」の集積と提供</li><li>・東京全体で「知」の集積と提供（東京全体が図書館）</li></ul>
<b>アクセシビリティ</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・全ての人のアクセシビリティを確保<ul style="list-style-type: none"><li>➤インクルージョンに資する最新技術を常にキャッチアップして提供</li><li>➤少数言語も含め、あらゆる言語の壁を克服</li></ul></li></ul>



### 3 コンセプトのベースとなる考え方 ①

#### 【コンセプトに繋がる文言】

- 知性との出会い / 知の喜びに触れる
- ライブラリーキュレーション（図書館の本の分類）によるセレンディピティ（偶然の産物）が創発性を担保
- デジタル社会の中でも図書館の中心にあるのは本
- 本を媒介にして、都民のいろんな層の人たちに対して、実際の課題と本とを繋ぐような立ち位置になれるか
- Book Beyond Book（本を超えた本）
- ひとり一人が本になり（＝知識、経験を伝える）、図書館は、人々（本と本）が出会う場
- 人間とはホモサピエンス＝共感、コミュニケーションが根底
- 知性、知識がアップデートされるわくわく感、エンタメ性
- この話は、単に一図書館の未来を考えるというより、人類の知の未来を考える話
- 東京シティ＝ライブラリー
- 東京全体が図書館
- 東京の、ひいては日本の知性をボトムアップ
- 「作る」「繋がる」が本でつながるのが図書館

### 3 コンセプトのベースとなる考え方 ②

【これまでの議論を収斂するフレーズ】

## Library for Creation (創造のための図書館)

### WHO 誰が

- ・ 子供
- ・ 学び、「本」への無関心層
- ・ 経済的に困難な状況にある方
- ・ 障害のある方
- ・ 高齢者
- ・ 国内外からの観光客
- ・ 図書館で働く人々 など

### HOW どのように

- ・ 本を中核にした創造の場
- ・ 映像や音、様々な機器  
(例；ロボット、3Dプリンター)  
による創造
- ・ アクセシビリティの確保
- ・ 多様な人々との交流

- 【環境】
- ・ ユビキタス
  - ・ 土地の歴史、自然地形を生かし、周辺環境と調和する施設

### 3 【参考】コンセプト事例

機関名	コンセプト・目指すべき姿・ミッション
ヘルシンキ中央図書館Oodi	①開かれた非商業的公共空間、②より機能的な社会に向けての情報とスキル、③住民自身が創造する豊かな都市体験、④本のある新しい生活（トゥーロンラッティの本の家）
石川県立図書館	県民の多様な文化活動・文化交流の場として、県民に開かれた『文化立県・石川』の新たな“知の殿堂”
武蔵野プレイス ※新公共施設基本計画策定委員会報告書	集う、学ぶ、創る、育む～知的創造拠点
オーテピア高知図書館	さまざまな人々の交流が深まり、県内の生涯学習や文化の発展に寄与するとともに、県民・市民の暮らしや仕事の中で起こるさまざまな課題の解決を支援する知的・文化的基盤とする。
Missoula Public Library	Spark Curiosity. Make Connections. Thrive Together. (好奇心を刺激しましょう。繋がりを作りましょう。一緒に繁栄しましょう。)
静岡県立図書館 (令和9年度完成予定)	① 県民の生涯学習・読書活動の拠点としての図書館 ② “ふじのくに”のことなら何でもわかる図書館 ③ 県内市町立図書館等を強力に支援する図書館 ④ 県民が出会い交わり、新しい文化を育む図書館

## 4 有識者会議まとめのイメージ

### ● 検討目的、社会背景

### ● 図書館の現状

### ● これからの図書館の方向性

#### ➤ これからの図書館に求められるもの

- ・ リアルな図書館の意義
- ・ 多様な人の知的好奇心を生みだし創造や交流を行う場
- ・ 誰もが図書館にある知にアクセスできる
- ・ 都市や人々の直面する課題の解決に向けて貢献

#### ➤ 機能

- ・ 知的好奇心を喚起し学びを深める
- ・ 多様な人との交流や創造活動を生み出す
- ・ 多様な知が集積する
- ・ アクセシビリティ

#### ➤ 機能発揮のための工夫

- ・ クリエイティブで居心地の良い滞在空間の整備
- ・ 他機関と連携した事業展開（他機関の保有情報の検索・提供やシンポジウム等）

### ● コンセプト